

〔論文〕

失敗談が描かれている道徳教材における 発問づくりに関する一考察

—多面的・多角的な考えを育むために—

藤 田 善 正
Yoshimasa Fujita

大阪総合保育大学
児童保育学部

本研究の目的は、失敗談が描かれている道徳教材を分析し、その傾向と問題点を考察する中で、発達の視点も加えて、よりよい教材の活用方法や発問を研究することである。それは、次期学習指導要領で示された多面的・多角的で深い考えを育むことにつながる。小・中学校の15の失敗談が描かれている教材分析とそれをもとにした発問づくりを通して有効な指導方法の研究を行った。その結果、失敗談が描かれている道徳教材に適用することが可能で、かつ価値の本質に迫れるような有効な発問づくりに共通する視点としては、①他者の視点から教材に描かれた事象を観ること ②失敗の原因を問うことの二つが挙げられる。また、失敗談が描かれている道徳教材において主人公は、常に失敗した人物とは言えない。教材によってそれぞれ有効な発問は異なってくるが、個別の教材に合致した発問だけでなく、いくつもの教材に適用することが可能な一般性をもつ発問を見出していくことが大切である。また、多面的・多角的な視点からの発問は、失敗談が描かれている道徳教材だけでなく、あらゆる教材を取り扱う時に重要な視点である。

キーワード：道徳授業、教材、失敗談、中心発問、多面的・多角的

1 問題と目的

平成29(2017)年3月31日、次期学習指導要領¹⁾が告示された。我が国の道徳教育の今後のあり方を方向づけるものとしては、既に平成27(2015)年3月27日に道徳に特化して学習指導要領が一部改訂²⁾されているが、改めて次期学習指導要領にも明記された。これによって、学習指導要領総則と「特別の教科 道徳」の関係がより明らかにされ、学校教育全体で行う道徳教育と、道徳科の関係がはっきりと示されたのである。また、その一環として、小学校では平成30(2018)年度より、中学校では平成31(2019)年度より検定教科書が全児童生徒に配布されるが、小学校の教科書では、これまでの道徳の時間において、指導上効果的であると教師の評価が高い教材がかなり多く掲載されている。例えば、「はしのうえのおおかみ」は、すべての教科書に登場している。また、指導方法としては、主人公の心情の読み取りに終わらせないために、役割演技や動作化を採り入れたり、問題解決的な学習を採り入れたりすることを期待して創られた教材も新たに登場している。

さて、指導上効果的であると教師の評価が高い教材は、主人公が成長・変容するものが多く、主人公の心の変容

を追うような発問が、道徳のスタンダードな発問として流布してきた。例えば、池田義雄が提唱した一読四分進法もそのような指導方法の一つである³⁾。そこでは、成長・変容する主人公一人に絞って、その心の変容を追うことが中心になっており、そのようなことを「窓口一本化」と呼んでいる。また、資料を起承転結に四分割して、特に転結の部分での変容を中心発問にしている。また、道徳は、心の教育であるから主人公の心を共感的に追っていけばよいと考えていた教師も見られる。とりわけ、道徳教育に関する研修が長年にわたって行われてこず、読み物を使って道徳授業が進められることが多いことさえ知らなかった地域の学校に勤務する教師は、たとえ「私たちの道徳」のような読み物の副読本を与えられても、指導書に書かれた発問例に基づいて授業を行うか、国語の物語文の心情読みと同じような教材分析や発問の手法をもとに授業していたというのが実態と言えよう。ところが、そのような発問の問題点は、主人公の気持ちを問う発問ばかりで授業が構成されるということであり、特に平成27(2015)年3月の学習指導要領一部改訂に併せて改善が求められるようになってきた。しかし、さらに大きな問題は、主人公が失敗したり、失敗をもとに反省したりするタイプの教材、あるいは主人公の失敗とは言

えないが、登場人物の失敗を描いた教材や主人公が終始一貫して変わらない教材等においても、主人公が成長・変容するものと同じように主人公の心の変化を追うような展開と発問がされてきた傾向が見られることである。ところが、特に失敗談が描かれている教材を取り扱う場合には、主人公が成長・変容するものとは違った視点からの発問が必要ではないだろうか。そのようなことから、次期学習指導要領のキーワード「物事を多面的・多角的に考える⁴⁾」こそが、求められる。また、そのようなことを可能にするためには、教材の特性を生かした教材分析をもとにした発問研究をすることが大切である。

本研究の目的は、道徳教材のうち失敗談が描かれているものを分析し、その傾向と問題点を考察する中で、発達の視点も加えて、よりよい教材の活用方法や発問を研究することである。(注1)

(注1) なお、用語としては、今後を見据えて「教材」を使うが、歴史的な事柄等を述べる場合には、「資料」を使うこともある。

2 多面的・多角的に考えるとは

「多面的・多角的に考える」という言葉は、学習指導要領のキーワードになっているが、既に社会科等いろいろな教科で使われており、道徳だけに使われる用語ではない。この言葉は、「主体的・対話的で深い学び」のうち、特に「深い学び」という言葉とも対応する。

「多面的」と「多角的」という言葉を国語辞典的に捉えると、「広辞苑」⁵⁾によると、

多面的・・・多くの方面にわたること。

多角的・・・多方面にわたるさま。多面的。

と、書かれており、その区別は詳らかではない。

柴原弘志⁶⁾は、「多面的・多角的に考えること」を一面的な考察ではないとしながら、さらに発達の視点を加えて、発達の段階が上がるほど、あるものや事柄がもっている多面性をみる力、ある事象を捉える時の多角的な観点というものは増すと述べている。さらに、柴原⁷⁾は、多面的に考えるとは、道徳的価値そのものが本質的に有している特性等の考えから考えることであり、多角的に考えるとは、例えば異なる立場や時間・歴史や空間といった観点から考えると分けて捉え、物事を一面的、表層的にならない考察や、自分とは異なる感じ方・考え方の交流による考察を求めている。

田沼茂紀⁸⁾は、「多面的」「多角的」と言う用語を、端的に言えば、複眼的なものの見方や推論から俯瞰的に捉

えることであるとしながら、大切なのは異なる視点を持つこととしている。

筆者は、「多面的」とは、学習対象が様々な面をもってること、「多角的」とは学習対象を様々な角度から考察し理解することと捉えている。そのことから、主人公の視点からだけでなく、他者の視点から教材に描かれた事象を観ることが大切であると考えている。

上述したように、これらの言葉に多少の違いはあるが、実際の指導にあたっては、「多面的」と「多角的」は必ずしも明確に分けられるものではないため、道徳科の学習指導要領及び解説においては、「多面的・多角的に考え」とひとくくりで説明していると考えられる。

3 学年ごとに見た代表的な失敗談が描かれている教材

藤田善正⁹⁾は、永田繁雄を中心とする東京学芸大学「総合的道徳教育プログラム」推進本部第1プロジェクトが調査した効果的だと思われた資料¹⁰⁾を小学校低・中・高学年のベスト5(合計15教材)をもとに、各教材に内在する指導上の課題とその改善や教材分析をもとにして、効果的な発問を考察した。その結果を主人公の成長・変容が描かれているかどうかという視点から検討すると、8作品に明らかに主人公の成長・変容が描かれている。一方、明らかに失敗談が描かれていると言えるものは、「かぼちゃのつる」1作品だけである。そこで、本研究では、これまでよく使われてきた道徳教材のうち失敗談が描かれている代表的なものを小学校低学年から中学生まで採り上げることによって、その教材分析をもとに、有効な活用方法や発問を児童生徒の発達をふまえて論じていく。表1は、いろいろな副読本等に使われてきた代表的な失敗談が描かれている教材である。

表1をもとに教材の筋を概観すると、小学校低・中学年では、人間の弱さや愚かさを描いた失敗談が描かれている教材(寓話)もあるが、学年が進むにつれて、主人公の失敗とその反省を通して、人間の弱さ(欲)やある価値を深く考えさせるような作品が増えてくる。

4 各教材に内在する指導上の課題とその改善

さて、表1に示された教材には、寓話や文学作品を道徳教材にしたもの、子どもの生活場面を描いた道徳の授業のために創られた作品、大人が主人公の道徳の授業のために創られた作品等があるが、その一つ一つに指導上の工夫や課題が存在する。

服部敬一は、「結末に問題のある資料をどう扱えばよいか」¹¹⁾の中で、主人公が行った道徳的行為や判断とその

表1 代表的な失敗談が描かれている道徳教材と出典

学年	小学校低学年	小学校中学年	小学校高学年	中学校
教材名 (出典)	「かぼちゃのつる」(東京書籍 1年 平成27 2015)	「ろばを売りに行く親子」(光村図書 3年 平成27 2015)	「うばわれた自由」(文部科学省「私たちの道徳」5・6年 平成26 2014)	「二通の手紙」(文部科学省「私たちの道徳」中学校 平成26 2014)
	「ひつじかいのこども」(日本文教出版 1年 平成27 2015)	「金色の魚」(学習研究社 3年 平成28 2016)	「残った仕事」(東京書籍 5年 平成27 2015)	「いつわりのバイオリン」(廣済堂あかつき「中学生の道徳」1年 平成27 2015)
	「金のおの」(東京書籍 2年 平成27 2015)	「雨のバス停留所で」(文部科学省「わたしたちの道徳」3・4年 平成26 2014)	「修学旅行の夜」(東京書籍 6年 平成27 2015)	「卒業文集最後の二行」(文部科学省「私たちの道徳」中学校 平成26 2014)
		「どんだん橋のできごと」(日本文教出版 4年 平成27 2015)	「くもの糸」(日本文教出版 6年 平成27 2015)	
		「新次のしょうぎ」(日本文教出版 4年 平成27 2015)		

結果に因果関係のないような結末に問題のある資料は、主人公の立場からの発問だけでなく、違う人物の視点からの発問が必要であることなど、一つ一つの資料に合った発問を考えることが大切であることを提唱している。

そこで、表1に計15の教材の分析や筆者がこれまで参観した授業・参加した研究発表会の指導案集・インターネットに公開されている全国各地の教師が行った指導案の事例を通して各教材が内包する指導上の課題を挙げ、その指導の改善について述べる。なお、教材分析と発問研究は車の両輪のようなものであり、教材分析をもとにして精選された発問を構成していくことが大切である。

(1) 第1学年及び第2学年 (小学校低学年)

① 「かぼちゃのつる」

みつばちや、ちょうちょうや、子犬などの注意を聞かずにつるを伸ばすというわがままなふるまいを続けていたかぼちゃが、あっという間に車につるを切られてしまう。

主人公一人に絞って発問する「窓口一本化」のような指導方法は、主人公が成長したり変容したりする教材では有効なこともあるが、失敗談が描かれている教材では有効ではない。「かぼちゃのつる」は、かぼちゃが周囲の忠告を聞かないために起こる失敗談が描かれている教材

(失敗した後泣いて反省はしているが)である。筋を追いかけてながら場面ごとに主人公のかぼちゃの気持ちの変化を問うだけでは、国語的な読み取りの授業になって、節度ある生活という道徳的価値の追求はできないという課題がある。主人公かぼちゃの気持ちだけ追いかけると、思い切り伸びたいんだ!⇒うるさいなあ⇒痛いよという変化はあるが、この心情の変化からは節度ある生活の大切さという価値に迫ることはできない。その改善として、失敗の理由を考えさせたり、忠告する側、即ち他者の視点(忠告する理由は違うが)から発問したりすることが、ねらいとする価値に迫るためには大切である。視点を変えて考えるような授業展開は、特に失敗談が描かれている教材や結末に問題のある教材において求められる⁹⁾。

② 「ひつじかいのこども」

羊飼いの男の子が、退屈しのぎに「おおかみが来た。」と嘘をついて騒ぎを起こした。大人たちはだまされて助けに来るが、嘘ということがわかる。それから、男の子は、繰り返して同じ嘘をついたので、本当におおかみが現れた時には、大人たちは信用せず、誰も助けに来てくれなかった。

原作はイソップ童話であり、この教材の主人公は男の

子であるが、男の子の視点だけで考えても、節度ある生活の大切さという価値に迫ることはできないという課題がある。その改善として、むしろ、だまされた村人の視点から発問する方が、村人の行動を支える心の変容を通して、嘘の怖さや正直、誠実という価値に迫ることができる。

「村人は、『おおかみが来た。』という男の子の声を聞いた時、最初は、どう思ったでしょう。」

「二回目は、どう思ったでしょう。」

「最後は、どう思ったでしょう。」

と順に問うことで、最初は「これは大変だ。」と思っていた村人の心が、次第に「またか。」「どうせ、また嘘だろう。」と変化していくことから、そのことを通して、嘘をつく信用されないとか、一つ嘘をついてそれが成功するとまた嘘をつきたくないという嘘の怖さの本質に迫ることのできる発問になるのではないだろうか。このように、他者の視点を入れた発問構成をすることによって、価値の本質に迫れると考えられる。これは、多面的・多角的に考えることにつながる。

③ 「金のおの」

ある木こりが木を切っていたが、手をすべらせておのを池に落としてしまう。困って池をのぞきこむと、神様が金のおのを持って現れて、木こりが落としたのはこの金のおのかと尋ねた。木こりが違うと答えると、神様は次に銀のおのを持って現れたが、木こりはそれも違うと答えた。最後になくした鉄のおのを持ってくると、木こりはそれが自分のおのだと答えた。神様は三本すべてを木こりに与えた。それを知った友達の木こりは、わざとおのを池に落とした。神様が金のおのを持って同じように尋ねると、その木こりはそれが自分のおのだと答えた。神様は、何も渡さずに池に沈み、木こりは自分のおのを失った。

これも、原作はイソップ童話であり、既に筋を知っている子どもも多いので、正直にすることは大切だというわかりきったことを再確認するだけの授業になりがちであるという課題があった。この授業改善のために取り組んだ研究としては、服部敬一¹¹⁾や福永悠人¹²⁾のものがある。この教材の主人公は国語的には正直な木こりと考えられがちだが、服部は、道徳授業として採り上げる場合は、むしろ正直にされたりだまされたりする神様の視点からのアプローチが大切であると述べている。一貫して正直にされることで本来落としたものではない金のおのや銀のおのまで与えようとする心が芽生え、だまされることによって落とした鉄のおのまで取り上げようとする

神様の心を考えることは、新たな視点を与えることができる。そのような意味では、この教材の主人公は神様であるということもできよう。また、この教材では、正直な木こりは、正直で一貫しており変容はない。そこで、正直な木こりと対比させる意味で友達の木こりを登場させている。福永¹²⁾は、違った角度から正直な木こりと他の木こり（友達の木こり）のおのを落とした理由、神様の問いに対する答えを分類して考えさせることを通して、正直という価値についてのより深い理解をさせている。小学生の児童においては、低学年といえども正直は善いことであり、嘘は悪いということは、家庭における躾やそれまでの教育を通して既に知っており、その理由もそれなりに答えることができる。だからこそ、道徳授業では違った角度からのアプローチをすることで、新たな発見をさせる必要がある。それは多面的・多角的に考えることにつながる。

(2) 第3学年及び第4学年（小学校中学年）

④ 「ろばを売りに行く親子」

ろばを市場に売りに行こうとした親子が、道ですれ違う人々の言うことをそのまま深く考えずに受け容れて行動したために、最終的には、大切なろばを失ってしまった。

イソップ原作のこの作品は、後年ラ・フォンテーヌ寓話に再編されている。これまでの道徳授業では、場面ごとの親子の気持ちを追うような展開が多く、価値について新たな発見がないという課題があった。その改善としては、この親子の愚かさや失敗の原因がどこにあるのかに気付かせることが、ねらいとする節度・節制・自立といった価値に気付かせることにつながると考えられる。また、このような愚かさは、子どもが学校で教師から注意を受けた時に、「だって、〇〇さんもやっていたから。」という言い訳にもつながっているのだから、それを授業の導入にもつくと、自分たちの生き方との接点をつくることができる。また、この教材は村人やろばの立場からも考えさせることによって新しい発見ができよう。村人たち一人一人は、むしろこの親子に対して好意的な想いから、こうしたらよいのではないかと語っている面もある。人の注意・忠告をよく考えずにすぐそのまま受け容れるところに問題があるのだから、そこに焦点を当てた発問をすることが本質に迫れる。また、その親子の姿勢の犠牲になってもあそばされるろばの立場に立って、ろばは、この親子のことをどう考えているかを問うことも多面的・多角的に考えることにつながる。

⑤ 「金色の魚」

おじいさんは、網にかかった金色の魚をお礼ももらわず海へ逃がしてやった。帰って、それを聞いたおばあさんは、新しい桶をもらうようにおじいさんを海に戻らせた。その後も、次第におばあさんの要求は大きくなっていったが、海の女王になりたいという願いは受け容れられず、すべては元に戻った。

この寓話は、ロシアの民話であり、道徳授業としては、節度ある生活態度の教材として使われていることが多い。この話には様々な教訓が含まれている。次第に欲をつのらせていくおばあさんに視点を当てて進める授業展開が多く見られる。一つ願いが叶うごとにだんだん傲慢になっていくおばあさんの姿を通して、人間の弱さにふれるような展開がよく見られるが、それだけでは新たな発見はあまりないという課題があった。その改善として、お礼としての願いは、どこまでなら許されるかという展開ならば、命を救ったお礼としてどこまでが許され、あるいは適当かという意味で児童の多様な考えを引き出すことができよう。さらに、金の魚の視点に立って考えれば、おじいさんを通して伝えられるおばあさんの願いをどう受け止めるかの変化を問うことで、違った角度からおばあさんの要求を考えることができる。さらに、魚の命を救ってもお礼ももらわないおじいさんの善なる側面を押さえながらも、おばあさんの言うことを使い走りのようにそのまま金の魚に伝えるおじいさんの覚悟や判断力の欠如を問うような展開も考えられるが、その場合は、むしろ、自主、自立の価値について考える授業となる。いろいろな価値を含みもつ本来道徳の授業のために創られたものではない教材を活用する時は、ねらいと共に、どの人物から何を問うかを考える必要があり、また、複数の人物から問うことが多面的・多角的に考えることにつながる。

⑥ 「雨のバス停留所で」

雨降りの日に母と外出したよし子は、停留所の前の軒下でバスを待つ人を無視して一番に乗り込もうとするが、母の毅然とした態度を見て自分のした行為についてこれでよかったのかと考え始めた。

この教材では、順番を守るものの意味や場面の状況を知的にきちんと理解させることが大切であり、それをあいまいにすると、緩んだ授業展開になるという傾向があった。また、この教材を扱った授業では、主人公のよし子の気持ちの変化や行動の理由を中心に発問する事例が多く、それ故に単調な授業になりがちになる課題

があった。よし子の行動の理由を問うことによって、よし子の人間的な弱さ（人間は時としてつい人として不十分な行動や誤った態度をとることがあること）に気付かせることは必要である。改善としては、母の行動の理由や、軒下でバスを待っていた人の立場から見て、よし子の一連の行動はどう思われていたのかななどの、主人公以外の視点からの発問によって、この教材を違った角度から見るのが可能になる。なお、その際、お母さんがいつもと違う顔をしているのは、他のお客に悪く思われなくなかったからという理由が出てくることもある。小学校中学年の道徳的発達を考えると、このような人に悪く思われたくないと思って、行動を規制するという側面もあるので、教師は、一つの意見として受け止めるべきである。

⑦ 「どんどん橋のできごと」

学校の帰り道に、4人の男の子がどんどん橋で増水して渦を巻いている川を見てふざけて遊んでしまう。初めは、棒切れや草を川へ入れて遊んでいたが、まことが傘を入れてしまった。幸い傘は橋の反対側から浮き上がってきたので、誘われたほくは、迷いながらも傘を入れてしまう。ところが、ほくが入れた傘は、布と骨がバラバラになっていた。ほくは壊れた傘をじっと見つめ、涙を流す。

この教材では、筋を追いつつほくの気持ちや考えを問う単調な授業展開が見られるという課題があった。しかし、授業改善のために問うべきは、4人の男の子たちがとった行動の理由こそが大切であり、そうすることで、主人公であるほくの人間的な弱さを見つけることが可能となる。服部敬一¹³⁾は、「あなたが道徳授業を変える」の中で、この教材を採り上げ、教材分析をもとに発問づくりをする中で、詳細にその指導上の留意点を述べているが、注目すべきは、ほくの涙の理由を問う発問である。失敗談が描かれている教材に限らず、登場人物が涙を流すという教材は多く存在するが、その理由は教材ごとにまちまちである。また、単一の理由でないこともある。「どんどん橋のできごと」の場合は、傘が壊れて損をしたとか、親から叱られるという次元のものではなく、川に傘を入れることを断れなかった自分の弱さを悔しく思う涙であることに気付かせたい。小学校中学年になって、失敗を通して反省するという教材が多く登場するようになるのは、ノーマン・ブル¹⁴⁾の道徳性の発達理論を参照すると、この時期が他律から自律へ向かう橋渡しの役割となる社会律の時期であり、友達によく思われたい・悪く思われたくないという動機で行動しがちであることも

関係している。

⑧ 「新次のしょうぎ」

新次は伊三郎おじさんとの将棋でおじさんが不在の時に、駒を動かすという不正をして勝ってしまう。新次はその苦しさを隠すためににこにこする。新次は雨の中を帰りながら自分のしたことを後悔し、涙を流す。

「新次のしょうぎ」では、場面ごとに新次の心情の変化を追うような展開がよく見られるという課題がある。その改善としては、まず、新次の駒を動かすという不正な行動の理由を問うことによって、勝ちたいと思う時は、正義感が薄くなってしまおうという人間の弱さをつかませることが大切である。また、新次の涙の理由を問うことを通して、不正をして勝っても後ろ暗いことがいつまでも心に残って、その発覚を恐れて、にこにこふるまっても本当に明るく生きることができないことに気付かせたい。「どんだん橋のできごと」と同様、新次の涙の理由を中心発問として問うことを通して、価値理解につながるという教材と言えよう。

(3) 第5学年及び第6学年（小学校高学年）

⑨ 「うばわれた自由」

自分の思いのままに行動することが自由であると思っているジェラル王子が、その考えが誤っていることを森の番人ガリユに諭されるが聞き入れず、ガリユを牢に入れる。ところが、やがて王となったジェラル自身も、国内の乱れがもとで囚われの身となり、改めて真の自由の大切さを知る。

どこの国とは特定できない某外国の話が多く登場するのも、小学校中学年以後の道徳教材によく見られる特色である。ジェラル王子を主人公にし、助言者・援助者として、正義感は強いが身分の低い森の番人ガリユを登場させているが、その助言を本気で聴かなかったことが、大きな失敗につながっており、やっと自分の失敗の原因に気付いたのは、牢の中であるという遅すぎた気付きを描いた教材である。この教材を使った授業でも、筋を追いつながりながらジェラルの心の変化や気付きを問う展開が多いという課題があった。その改善として、本当の自由とは何かということ問いかけて、自分勝手や、やりたいことはやった者勝ち的な放縦との違いに気付かせることがより高い価値理解につながるよう中心発問を設定することが求められる。また、高い身分に生まれ、自分を抑制することを学ばず、物心ついた時から多くの自

由が与えられた者が陥りやすい問題もほのめかしているが、小学校高学年の児童にそこまでの気付きを求めても、限られた児童しか気付かないと考えられる。

⑩ 「残った仕事」

ぼく、佐代子、道夫の図書係の3名が、学級に寄贈された図書を貸し出すための準備作業に取り組んでいるところへ、同級生の次郎が道夫を遊びに誘うためにやってくる。ぼくは遊びに誘われた道夫に対して作業を続けるように求めるが、佐代子が仕事を肩代わりすることを承諾したため、結局2人で作業を行うことになる。結果的に、その日のうちに作業を終わらせることはできず、ぼくは、仕事を放り出して遊びに行った道夫と、できもしない仕事を請け合うという行動をした佐代子を見ながら憤る。

この教材は、時間を追いつながりながら主人公「ぼく」の視点で書かれており、その心の変化を追うように創られている。これまで行われた実践例を見ても、「ぼく」を主人公として、その気持ちを聞くような展開ばかりである。しかし、それでは、社会的役割の自覚と責任に対する価値に迫れず、ぼくが友達の行動に憤るところを感じさせるところでとどまっているケースが多いという課題がある。この教材は、個人の失敗とは言えないが、学級全体としては失敗と言える教材である。そこで、その改善として、「道夫と佐代子のそれぞれどんなところに問題がありますか。」と問いかけ、「ドッジボールに勝つこともクラスのためになると思いませんか。」とゆさぶりをかけ、「明日から本の貸し出しができなくて困るのは誰でしょう。」と問うことで、学級全体が困ることを押さえた上で、「この話から、仕事をする上で、大切なことはどんなことだと思いますか。」と、ねらいとする価値に迫るような発問をする展開が求められよう。

⑪ 「修学旅行の夜」

修学旅行の夜、班で夕食後のことが話題になり、「自由が欲しい。」と言いつつも、「できるだけ静かに寝よう。」ということになった。しかし、消灯後まくら合戦になってしまう。騒いでいると、隣の部屋の人から苦情を言われ、先生からも注意される。

この教材は、学年を問わず、実際の宿泊行事においてありがちなことであり、子どもにとっては、理解しやすい教材である。この教材においては、筋を追って、班長である「わたし」の心の動きを中心に発問構成されることが多く、自由と責任の価値に迫りにくいという課題が

あった。その改善として、ねらいとする自由と責任の価値に迫るためには、むしろ、反価値的言動を行う班員の鈴木さんや石井さんの言動の理由を問うことを通して、集団行動において自由と自分勝手の違いを考えさせるような指導が求められる。「わたし」だけでなく複数の人物の視点からこの教材にアプローチすることで、異なる立場から考えることが可能になる。なお、昭和の終わりから平成の初めの一時期において、学校行事と道徳授業のセット化がよくないと言われた時期もあった。その後、総合単元的学習や道徳の時間と他の教科・領域との関連を大切にするという平成20年に公示されて、新学習指導要領にも引き継がれた学習指導要領の理念をふまえると、修学旅行の前にする方が有効か、修学旅行の後にするのが有効かと問われた場合、集団行動における自由と責任の考えを深めるという観点からは、前者の方が子どもへの意識化としては有効であると考えられる。

⑫ 「くもの糸」

釈迦は、極楽を散歩中に下の地獄を覗き見た。苦しむ罪人の中にカンダタという男を見つけた。カンダタは悪の限りを尽くしたが、過去に一度だけくもの命を助けたという善行を思い出した釈迦は、彼を地獄から救い出してやろうと、一本のくもの糸をカンダタめがけて下ろした。しかし、カンダタは自分の下から続いてくる多くの罪人達に向かって「この糸は俺のものだ。下りろ。」と喚いた。するとくもの糸がカンダタの真上の部分で切れ、カンダタは再び地獄の底に落ちてしまった。

宗教的な観点から観れば別だろうが、善行をすれば必ず極楽や天国に行き、悪行をすれば必ず地獄に落ちるという因果関係は、現実的には不明か、科学的ではないということになる。この教材は、カンダタを共感的に捉えて指導するか、批判的に捉えて指導するかによって、その展開が大きく変わってくる。筋に沿ってカンダタの気持ちを追えば、カンダタが何としても地獄から抜け出したいという想いからくもの糸を昇りはじめ、次から次へありの行列のように上がってくる罪人を見た時には、自分中心の考えが芽生え、再び地獄に落下してからは、自分を反省するか、他の罪人のせいにするかに分かれるという授業展開が多く見られ、人間の欲や弱さを深く掘り下げられていないという課題があった。しかし、その改善のために押さえておかなければいけないことは、自分が助かろうと考えた時には、他の人のことなど考えにくいという人間の欲や弱さに気付かせることがある。そのことを通して内省的な考えを育てていきたい。

(4) 中学校

⑬ 「二通の手紙」

動物園の入園係をしていた元さんが、閉園間際に姉弟を入園させたために停職処分となり、自ら辞職したことを元さんの元同僚であった佐々木が思い出して語る。姉弟の情にほだされて規則を破ったことが、子どもの安全を脅かしたり、何の関係もない大勢の人に迷惑をかけてしまったりする結果になった。停職処分の手紙を受け取った元さんが、改めて命を守るべき規則の意義を理解し、「少しくらいなら」という自分の中に甘さがあったことを心から納得して、晴れ晴れとした表情で職場を去っていく。

この教材を使って授業を行った教師の口からよく出てくる発言は、「生徒が元さんに同情的になって、なかなか規則尊重という価値理解に到達しない。」という課題である。どうして、そのようなことが授業実践の中から多く出現するのだろうか。それは、元さんが姉弟を動物園に入れる時、動物園の規則を理解していたのかという問いをせずに、なぜ入れてあげたのかと発問するために起きると考えられる。授業改善のためには、その発問を入れることが求められる。また、姉弟が見つかったのだから、罪が重すぎるという声もよく聴かれる。そこで、「もし何らかの事故が起きていたら、どうなったでしょうか。」という問いを入れることによって、元さんの考えの甘さを押さえておくことも必要である。元さんがあまりにも「よい人」に描かれているために、規則尊重と言う価値になかなか到達しにくい教材と言うこともできる。また、「もしも、姉弟の母親から手紙が来ていなかったら、同じような気持ちになれたでしょうか。」といったシミュレーション的な発問も有効であろう。ただし、元さんが失業して生活上の心配もあるだろうに、晴れ晴れとした表情で職場を去って行けたかどうかということについては、最後まで疑問が残る。

⑭ 「いつわりのバイオリン」

バイオリンづくりの師匠フランクは、弟子のロビンが作った作品を自分のものと称して著名な演奏家に提供してしまう。尊敬していた師匠の、そのような行為に弟子のロビンはショックを受けるが、その後黙々とバイオリンづくりに励む。弟子が作ったバイオリンに自分のラベルを貼ってしまったフランクは、そのことをロビンに打ち明けることができず次第に心を荒廃させていく。そんなフランクを見ているのが辛くなったロビンはフランクの元を去り、故郷でバイオ

リン職人として腕を磨いた。やがて、その他の弟子達も次々とフランクの元を去り、フランクは没落してしまった。そんなフランクにロビンから手紙が届き、フランクはそれを見て涙を流す。そして、便りをしたためようと筆を握る。

この教材の主人公はフランクであるが、筋に沿ってフランクの心を追うだけでは、物語文の心情読みと変わらないという課題がある。その改善のためにここで問わなければならないのは、フランクのような名人がそのような嘘をつくところまで追い込まれたのかとか、次第に心を荒廃させていったのはなぜかといった人間の弱さを追求することである。それと同時に、弟子のロビンが師匠のフランクを見る眼がどう変化していったかを押さえておくことも大切である。尊敬していた師匠の暗転する人生を見る中でも、かつて受けた恩を忘れていないロビンの人間性の豊かさにも気付かせていきたい。この教材は、まさに複数の視点から人間の行動を考え、価値理解を通して人間理解を深めるという点で興味深い教材である。

⑮ 「卒業文集最後の二行」

私（一戸冬彦）は、小学校時代の忘れられない苦い思いをエッセイに綴った。そこには、同級生の子をいじめたことへの反省と懺悔の気持ちが描かれている。T子の書いた卒業文集の最後の二行を読んで、T子の深い悲しみと苦しみを知り、私は、深く反省するのである。それから数十年、私は、過去の自分の行為に苦しみ続けている。

この教材は、単純な失敗談が描かれている教材ではない。人は、失敗の中から学んで成長していくものであるが、私（一戸冬彦）は、数十年前に行ったいじめに今も苛まれている。もちろん、いじめを肯定するわけではないが、私（一戸冬彦）の考え方の中に、人間はよりよく生きたいと願っているという真理が描かれている。この教材の扱いにおいては、この点を外してはいけないが、実際にはふれられていないこともあるという課題が見られる。「いじめが悪い」ということならば、子どもは小学校入学以前から言葉としては知っている。また、その理由もそれなりの説明ができる。この教材においては、その改善として、いじめられる立場からだけでなく、いじめめる立場からものを見ることや、反省に到るきっかけを考えさせることや、時間の経過を置いて自分のした行為を客観視することが大切であることなども押さえておきたいことである。

5 失敗談が描かれている教材における有効な発問づくりの視点

そこで、第4節で行った小学校低学年から中学生向けの15の教材分析をもとに、その発達的な特色を捉え、同時に、失敗談が描かれている教材に適用することが可能で、かつ価値の本質に迫れるような有効な発問づくりに共通する視点を探ってみた。そこで、(1)子どもの発達の視点から、(2)失敗談が描かれている教材における「主人公」の視点から考察してみた。

(1) 子どもの発達の視点から

小学校低学年の教材は、反省の有無は別として、主人公とされる登場人物の欲求に一定の理解をすることは可能であっても、人間のもつ弱さがもろに表面化するところにその特徴があり、それが失敗の原因にもつながっている。「かぼちゃのつる」のかぼちゃや、「ひつじかいのこども」の男の子や、「金のおの」の友達の木こりは、そのような人間のもつ弱さを体現した人物として描かれている。そこで、失敗の原因を問うことによってそのような弱さを浮き彫りにするような発問をすることが求められる。また、低学年といえども、他者の視点から教材に描かれた事象を問うことによって、多面的・多角的に考えることが可能となる。「かぼちゃのつる」における忠告する動物たち、「ひつじかいのこども」におけるだまされた村人たち、「金のおの」における正直にされたりだまされたりする神様は、まさにそのような他者である。

中学年になると、友達の影響を受けやすくなっていくと同時に、失敗を通して反省するようにもなってくる。特に子どもの生活を扱った「どんどん橋のできごと」や「新次のしょうぎ」のような教材では、人間のもつ弱さが原因で失敗した後、主人公が涙を流すなど、反省の姿がはっきりと描かれている。それならば、むしろ、その涙のわけを問うことを通して、周囲に流されてしまった自分の弱さや、不正をして勝っても嬉しくないばかりか、不安などの負の感情が芽生えてくることに気付かせることが大切であり、そのような発問を中心発問にすることが効果的である。また、「ろばを売りに行く親子」「金色の魚」のような寓話は、子どもが既に筋を知っていることもあるので、筋を追って人物の気持ちを問う授業展開では、新たな発見のある授業にはなりにくい。そこで、ろばの視点から親子を考えさせたり、金色の魚の視点から、おばあさんやおじいさんを考えさせたりすることで、新たな発見のある授業にすることが可能である。これも、他者の視点から教材に描かれた事象を観ることの例である。

友達の影響を受けやすい傾向は、小学校高学年でもよく見られる。集団意識が強くなっていく小学校中・高学年では、友達によく思われたい、悪く思われたくないという意識から行動することや、周囲に流されやすい傾向もあるので、それを描いた教材も多い。「残った仕事」の道夫や、「修学旅行の夜」の「わたし」の弱さは、まさにそのようなものである。そのような弱さが失敗の原因であることに気付かせることが大切であり、「くもの糸」では、人間の弱さそのものを問うような発問が求められる。

中学校の教材では、失敗談が描かれている教材といえども、むしろ性善説に基づいて主人公が描かれているところがあり、「二通の手紙」の元さんのように人間が規則尊重に関する考えが甘く、情にほだされてする失敗や、「いつわりのバイオリン」のフランクのように魔がさしたような自分の弱さが表出したためにしてしまった失敗に対しては、押さえをしっかりとしないと、主人公に同情してしまうような授業展開になる。さらに、「卒業文集最後の二行」の私（一戸冬彦）のように、過去の過ちを深く反省する人物の姿を通して、だからこそ、人間は素晴らしいという人間讃歌にまで高める指導が可能になってくる。

発問の視点として、多くの教材に使うことのできる発問は、①他者の視点から教材に描かれた事象を観ること②失敗の原因を問うことの二つが挙げられる。教材によってそれぞれ有効な発問は異なってくるが、個別の教材に合致した発問だけでなく、いくつもの教材に適用することが可能な一般性をもつ発問を見出ししていくことが大切である。当然のことながら、行為の理由を問うことを通して、動機を考えさせることは、小学校低学年からしていくことが大切である。認知発達¹⁵⁾の立場をとるジャン・ピアジェ¹⁵⁾は、語り聞かせた物語に対する子どもの道徳判断から、8歳前後を境に判断の基準が結果論から動機論に、また、他律から自律へと移行することを見出したが、そのような研究結果は、道徳授業に反映させることが可能であり、具体的には、人物の行為の理由（動機）を問うことで、可能となってくる。

(2) 失敗談が描かれている教材における「主人公」の視点から

道徳授業において、主人公は、その教材の中で自覚した（変化した）登場人物に設定されることが多い。それは、道徳教材（資料）として創られた作品の中には、主人公の変容を追うことが本時のねらいに直結することを期して創られたものがあることもその一因である。しかし、教材によっては主人公が変容を遂げていないことや、

その言動が一貫していたり、失敗して変容を遂げていなかったりするものもある。特に、小学校低学年の失敗談が描かれている教材ではそのような傾向が見られる。そのような場合、むしろ、主人公に対する考え方を拓げる必要がある。例えば、「ひつじかいのこども」を国語教材として観れば、主人公は羊飼いの男の子と考えられるが、道徳授業においては、男の子の心を追うだけでは正直、誠実の価値にはつながらず、むしろ、だまされた村人の心の変容を追うことが、ねらいとする正直、誠実の価値に直結しやすいと考えられる。「金のおの」においても、国語教材として観れば、最初の木こりが主人公であると考えられるが、道徳授業においては、正直にされたりだまされたりした神様の視点から考えることがねらいとする正直、誠実の価値に直結すると考えられる。「金色の魚」では、ねらいによって主人公が変わることもある。

道徳教材においては、主人公は、「ぼく・わたし」のように、その教材の筆者として登場する人物の視点で書かれたものが多くある。また、教材の最初から最後まで登場して、その中で成長・変容する人物を主人公とする場合が多いだけでなく、その成長や変容を追うことがねらいに迫るように創られている場合もある。これは、確かに国語教材の扱いとしては有力な視点であろう。しかし、道徳教材では、その視点からだけではなく、ねらいとする価値の視点からも検討する必要がある。その時、主人公に対する考え方が変わってくる場合もある。さらに、どのような教材においても主人公以外の人物の視点から問いかけることも、多面的・多角的な考えを育てることにつながる。ある教材を扱う時に、どのような発問が有効かは、その教材の特性だけでなく、子どもの発達的な視点も加味して創られ、構成されるべきである。

6 まとめ

本研究の目的は、道徳教材のうち主人公と呼ばれる人物が失敗する、あるいは主人公を含む集団が失敗する失敗談が描かれている道徳教材を分析し、その傾向と問題点を考察する中で、発達の視点も加えて、よりよい教材の活用方法や発問を研究することである。それは、次期学習指導要領で示された多面的・多角的で深い考えを育むことにつながる。方法としては、小・中学校においてよく活用される15の失敗談が描かれている道徳教材の分析とそれをもとにした発問づくりを通して、それぞれの教材における有効な指導方法の研究を行った。その結果、一つ一つの教材だけでなく、失敗談が描かれている道徳教材に適用することが可能で、かつ価値の本質に迫

れるような有効な発問づくりに共通する視点としては、①他者の視点から教材に描かれた事象を観ること ②失敗の原因を問うことの二つが挙げられる。また、国語における主人公と、道徳における主人公に対する考え方は異なる。道徳においては、失敗談が描かれている教材の主人公は、常に失敗した人物とは言えない。教材によってそれぞれ有効な発問は異なってくるが、個別の教材に合致した発問だけでなく、いくつもの教材に適用することが可能な一般性をもつ発問を見出していくことが大切である。また、多面的・多角的な視点からの発問は、失敗談が描かれている教材だけでなく、あらゆる道徳教材を取り扱う時に重要な視点である。

(参考・引用文献)

- (1) 文部科学省 (2017) 学校教育法施行規則の一部を改正する省令 小学校学習指導要領・中学校学習指導要領 文部科学省
- (2) 文部科学省 (2015) 学校教育法施行規則の一部を改訂する省令 小学校学習指導要領・中学校学習指導要領 文部科学省
- (3) 大阪小学校道徳教育研究会著 池田義雄監修 (1998) こうすればできる 道徳の学習—子どもが本気になる—読四分進法 東洋館出版社
- (4) 文部科学省編 (2015) 小学校学習指導要領解説 17~18 文部科学省
- (5) 新村出編 (1991) 広辞苑 第4版 岩波書店
- (6) 柴原弘志著 (2016) 「特別の教科 道徳」の時代へ向けて『道徳教育の視座 vol.6』 廣済堂あかつき
- (7) 柴原弘志著 (2017) 『『特別の教科 道徳』の授業づくりと評価』～主体的・対話的で・深い学び～ 日本道徳教育方法学会第23回研究発表大会 課題研究発表資料
- (8) 田沼茂紀著 (2016) 「多面的・多角的」月刊 道徳教育 11月号 66 明治図書
- (9) 藤田善正著 (2017) 道徳の教材分析に基づいた発問の研究 大阪総合保育大学紀要 49~60 大阪総合保育大学
- (10) 東京学芸大学編 (2012) 道徳教育に関する小・中学校の教員を対象とした調査-道徳の時間への取組を中心として-〈結果報告書〉 東京学芸大学「総合的道徳教育プログラム」推進本部
- (11) 服部敬一著 (2014) 結末に問題のある資料をどう扱えばよいか 道徳教育学論集第17号 61~74 大阪教育大学道徳教育学専修
- (12) 福永悠人著 (2015) 学習指導要領の一部改正によって道徳の授業に求められるもの 日本道徳教育方法学会第21回研究発表大会 課題研究発表資料
- (13) 服部敬一 (2013) あなたが道徳授業を変える—ベテラン小学校教師からの8つの提言 櫻井宏尚・服部敬一他著心の教育研究会監修 8~23 学芸みらい社
- (14) ノーマン・ブル著 森岡卓也訳 (1977) 『子供の発達段階と道徳教育』明治図書出版
- (15) ピアジェ著『子どもの道徳判断』大伴茂訳 (1957) 『児童道徳判断の発達』同文書院

Discussion on Making Questions Concerning Moral Education Teaching Materials Including Failure Stories : To Cultivate Multifaceted and Diverse Ways of Thinking

Yoshimasa Fujita

Osaka University of Comprehensive Children Education

The goal of this study is to investigate better methods for utilizing teaching materials and better questioning by analyzing teaching materials including failure stories and discussing their tendency and issues, with perspective of students' development. This leads to cultivating multifaceted, diverse and deep ways of thinking indicated in the next curriculum guidelines of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. Investigation on effective teaching method was performed by analyzing 15 teaching materials known as failure stories used in elementary and junior high schools and by making questions based on the analysis. The results showed that there are two perspectives common to effective questioning which is applicable to teaching materials including failure stories and enables approach to the nature of values: ① looking into the events described in teaching materials from other's perspective and ② determining the cause of failure. Additionally, main characters in teaching materials including failure stories are not always those who failed. Effective questions vary depending on the teaching material, however, it is essential to find out not only questions that comply with the individual teaching material but also to find out universal questions applicable to multiple teaching materials. Moreover, questioning from multifaceted and diverse perspectives is important when dealing not only with teaching materials including failure stories but also with various teaching materials.

Key words : moral education classes, teaching material, failure story, main questioning, multifaceted and diverse

